

海洋性スポーツ，レクリエーションの特性と将来展望

酒 井 哲 雄*

The Nature and Prospect of Marine Sports and Recreation

Tetsuo SAKAI*

Abstract

One of the foundation philosophies of the National Institute of Fitness and Sports is to train leaders and instructors of marine sports and recreation. There is also a need to explore philosophies, programs, teaching methods, and facilities and equipments of marine sports and recreation as the National Institute in this area. The purpose of this paper is to describe the nature of marine sports and recreation, and to suggest the prospect of marine sports and recreation in Japan, focussing on its educational aspects.

In Japan, aquatic programs such as swimming and fishing have been major parts of marine sports and recreation. More recently, board sailing have become wide-spread throughout Japan. The type of marine sports and recreation can be categorized by the motion and objectives of the activities. Since there are a variety of programs in marine sports and recreation, the programs should be constructed according to participants' characteristics and needs. Marine sports and recreation have great potentiality in adolescent education, specifically psychological, social, intellectual, and physical development. It is suggested that the programs of marine sports and recreation can be contributed to wisely use, worthwhile use and creative use of leisure.

KEY WORDS : *Marine sports, Marine recreation, Human education*

1. はじめに

鹿屋体育大学の創設の趣旨は、スポーツ、レクリエーションの分野における実践的な指導者の養成が一つの狙いとされている。しかし実践的指導者は、単に、従来からある体育、スポーツ、レクリエーション分野にとどまらない未開拓の分野における指導者の養成も期待されている。

このために、本学ではその立地条件を活かして、海洋性スポーツ、レクリエーションの指導者の養成を始めようとしている。と同時に、本格的に研究、開発が着手されていない海洋性スポーツ、レクリエーションの理念、プログラム形態、指導方法、施設、用具などそのスポーツとしての競技性と大衆性、レクリエーションとしての大衆化と啓蒙などを、多面的かつ総合的に基礎的研究と教育を試みようとしている。

本稿では、わが国が四囲を海洋に囲まれながら、海洋性スポーツ、レクリエーションが発達しなかった理由、とくに海洋性スポーツ、レクリエーションの持つ特性と課題の二、三を摘出し、併せて将来展望を人間教育の視点、とくに青少年教育のなかでの可能性を考察してみた。

2. 海洋性スポーツ、レクリエーションの定義

一般的に海洋性スポーツ、レクリエーションは、英語として Marine Sports and Recreation, Aquatics, Water-front Program のいずれかが用いられている。しかし、その英語の表現のニュアンスは必ずしも一定化したものでなく、夫々の観点とくにプログラムを指向するグループなり団体の歴史的伝統によって言い慣らされた来たと解釈されており、野外活動などキャンプでの通常の水上の

*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya

プログラムにおいては、ウォーターフロント・プログラムが用いられている。また古くから青少年活動に、水泳指導をプログラムとして実施して来ているYMCAなどの団体では水泳プログラムと水上に関係するプログラムを包括的に取り上げる立場からアクアティックス・プログラムと言ふ表現で今日までとって来た。

昨今の傾向としては、漸次、海洋性スポーツ、レクリエーションなど用語が定着して水辺、水上、水中の水に関係して展開される全てのプログラムは、その展開の場が湖沼であれ海であれその用語で呼ばれている。その内容とするものは、海水浴、水泳、潜水、漕艇、帆走、ボートイング、フィッシングとさまざまである。

ある野外運動研究会では、海洋性スポーツ、レクリエーションを水辺野外活動として位置づけ、プログラム展開の場を人工的水域 自然的水域に分けその活動でのプログラムを位置づけているのは興味深い。¹⁾

また、海洋性スポーツ、レクリエーションの発祥地であるアメリカでは、海洋性スポーツ、レクリエーションの主流は、帆走、ボートイングのプログラムに加えて、スポーツ・フィッシングが中心になりつつあることに着目したい。

3. 日本における海洋性スポーツ、レクリエーションの現状

現況を分析する前提として 海洋性スポーツ、レクリエーションの定義が曖昧な段階では、その実態を掴みにくいが諸統計から類推してみることにする。

海水浴場は、公的機関 団体に指定され、それなりの施設を持ったものは全国で1,351ヵ所、水辺一海水浴を楽しむ人口としては 推定3千万人を下らないとされている。

これに対してボートイング、帆走などの基地となるべき係留施設 水域施設 陸上施設その他のサービス施設を備えた港湾としてのマリナーは、全国で約320ヵ所（その内都道府県の公共マリナーは32ヵ所）そのマリナーでのヨットモーターボートの保管隻数は約2万隻とされている。²⁾しかし、

別の統計によるとヨット・モーターボートを含めたプレジャーボートは91,678隻と報告されている。³⁾また、海洋性スポーツ、レクリエーションの重要な分野である魚釣り人口は、約2千万人と推定されている。

これと対比して、アメリカでは水上スキー人口は2,800万人、ヨット人口 1,900万人、カヌー、カヤック人口 2,900万人、ボートイング人口 3,790万人と報告されている。⁴⁾

このことは海岸レクリエーション施設また港湾レクリエーション施設の整備の不備や不足で、海洋性スポーツ、レクリエーションの条件に恵まれたわが国の立地条件にかかわらず、大衆化していない現況の一端をのぞかせている。しかし、年々国民の志向が、海洋性スポーツ、レクリエーションに傾斜している現状に鑑み、海浜レクリエーション基地づくりをはじめ、公共マリナーの整備が徐々に始められつつある現状である。いづれにしても、わが国の現況としては水辺での海水浴、磯あそび、魚釣りが海洋性スポーツ、レクリエーションの中心であることを裏づけている。その中において最近とみに激増の傾向をみせているものとしては、ボードセーリング（ウィンドサーフィン）があり、サーフィンのように地理的環境に左右されるプログラムと異ったものとして、日本全国に広く普及し始めている。しかし正確な普及の実態は明らかにされていない。

4. 海洋性スポーツ、レクリエーションの特性

海洋性スポーツ、レクリエーションをその特性から分類すると前述した如く、そのプログラムの展開の場からする分類とスポーツ、レクリエーションの動的エネルギーによる分類もできる。例えば、海水浴、水浴び、スキングダイビング、スキューバダイビングは人力によるものであり、カッター、ボート、カヌー、カヤック、櫓かい舟のパドル、オール、櫓を利用しての撈漕は人力によるものである。

これに対して自然の風をエネルギーとして走るものは、ヨット（小型艇から中、大型艇クルーザー

に至るまで)ボードセーリング(ウィンドサーフィン)がある。これとは別に船内・外機(外燃機関—蒸気タービン, 内燃機関—ガソリン機関, ディゼール機関)のエンジンの力を借りてのボートリング, 水上スキー, 水上カイト, ジェットスクーターとさまざまである。

しかし, 海洋性スポーツ, レクリエーションを陸上のスポーツ, レクリエーションとの対比において, 運動様式また動態モーションを中心にして考えてみると表1の様になる。

Table 1.

The Type of Marine Sport & Marine Recreation

Motion	Objectives
Watching	Weather, Fish, Mollusca, Wave, Bird, Cloud
Catching	Fish, Animal
Sailing	Yacht, Motor-sailer, Surfboard, Cruiser
Driving	Power Boat, Jet Ski, Wet Bike, Water Skiing, Water Kite
Rowing & Paddling	Canoe, Cutter, Boat, Kayak
Diving	Scuba (Self-contained Underwater Breathing Apparatus) Skin Dive
Building	Model Ship, Yacht etc.

従って, 海洋スポーツ, レクリエーションはプログラムの種類において極めて限られたものを想定しているのではなく, 多様化したプログラムのなかで, 多様な運動様式をとりながら展開されているもので, 巾広い特性をもったスポーツ, レクリエーション活動と言える。

このために, このプログラムを展開するにあたってのリーダーシップなり, (技能的なものを含めた)原理, 原則, またプログラム用具, 備品, 施設の吟味が問われてくることになる。

5. 海洋性スポーツ, レクリエーションの遅滞の要因とその克服

さまざまな特性をもち将来に展望が期待される

海洋性スポーツ, レクリエーションが, 社会的認知も支持も弱く且つまた大衆化していない要因は何処にあるか, 今後この種のプログラムを推進させるためには, 是非とも検討しておかなければならない課題がある。

1) 海への関心

われわれの持つ自然観の中には古くから海への怖れ, “板子一枚下は地獄”的な思想が, 限られた海に生きる人達以外の大多数の人たちの中では支配的であった見ることが出来る。と同時に永年に及ぶ鎖国がある意味で海洋から閉ざれた存在としてわれわれを置いて来た。交易に従事するか, 漁撈に従わざわるもの以外, 沿岸を離れて海洋に接することは皆無であった。このことは少数の海外雄飛の志をもったもの以外, 14世紀末から16世紀にかけての西欧の大航海時代の出現を招来した社会的コンパクト—食糧, 香料, 財宝の確保のためと海外遠征, ローマカトリック教会のキリスト教伝道のための大航海, 宗教的迫害によるヨーロッパ大陸脱出等の事態を, 日本では多くの人が経験しなかった。この閉ざされた列島で18世紀末までは海洋とは全く無縁であったことが, 海への関心を稀薄にしスポーツ, レクリエーションの場を海洋に求めることなど夢想だになかったと解される。

ヨット帆走がスポーツあるいはレクリエーションとして発達したのは17世紀中頃と言われている。1660年5月にオランダの流刑地から帰国したチャールス2世のウエストミンスター寺院での戴冠式に, JAGHAT SHIP をオランダ国民が贈呈したのが契機となり, ヨットが一般的に広まったとも言われている。明治初年に至るまでわれわれの海洋での遊びは磯遊び, 水浴, 水練の類か, 祭事での舟遊び程度が限度で, ヨット帆走をスポーツ, レクリエーションとすることは誰も考えなかった。

2) 社会的要因

海洋の関心の稀薄さに起因して海洋性スポーツ, レクリエーションへの関心が低く, 社会的バックアップが欠如していることが停滞, 遅滞を招いている。前述の海洋性スポーツ, レクリエーション

ンの基地となるマリーナの建設を例にしても陸上構築物と異なり、海上構築物の建設に際しては莫大な資金が必要となる。又 港湾での建造物については環境規制のほか海面利用との関係での漁業権の問題とのからみがあるので、社会的バックアップなくしては、基地づくりは容易ではない。と同時に海洋性スポーツ、レクリエーションは、ごく限られた一部の人たちのプログラムとしての理解が根強く、社会的な資本投下も微弱であり、公共投資は無論のこと民間資本の投資も出遅れているのが実状である。

さらに、海洋性スポーツ、レクリエーションの主流をなす帆走を例にしてもヨットの価格はマスプロダクションの段階ではなく、まだまだコスト高で、大衆化を阻んでいる。これと相即して技術的、技能的指導の面とくに安全を含めてのリーダーシップが最低限度要求されるスポーツ、レクリエーションで、その面でのリーダーシップの不足も停滞を招いている社会的要因の一つである。

このほかさまざまな停滞、遅滞をおこしている社会的諸要因が数々あるが、時代の推移とともに漸次、改善、改革がなされて海洋性スポーツ、レクリエーションが、余暇時代における一つのプログラムのジャンルとして社会的認知を受け、大衆化が定着化するものと理解されて来ている。このためには海洋性スポーツ、レクリエーションの特性を社会に啓蒙するとともに、海洋性スポーツ、レクリエーションの価値が認知されるに至る余暇活動、教育活動、身体活動の諸側面の有意性の実証と、その実際のプログラム展開の科学的理念に基いた指導大系の研究と実践が、学際的背景のもとに追求されることが望まれている。

6. 人間教育の側面から見た海洋性スポーツ、レクリエーションの価値

海洋性スポーツ、レクリエーションは人間教育とくに青少年教育のなかでの諸側面—心理的、社会的、知的、身体的側面を通して省察するとき、大きな価値 (Value) を有している。

第1に心理的側面としては「スポーツ、レクリエーション活動は、健全な感情の働きに寄与す

る」⁵⁾と心理学者のメニンジャーが指摘しているが、海洋スポーツ、レクリエーションはそのことを充足している。とくに、この海洋性スポーツ、レクリエーションは活動展開の場が大自然の真只中であり、体験するものが新鮮でありかつ非日常的状况のなかでの経験はまさしく心理的緊張を弛緩させるのに最大の効果ありとされる。

第2に社会的側面としては、海洋性スポーツ、レクリエーションのプログラムでの細心の留意点は安全の問題である。安全の確保は、自己の安全は無論のこと、他者に対する安全への配慮から生起するものである。このことは他者に対しての感受性ひいては集団への貢献、集団への帰属心を促がし、基本的な人間集団への依存所属意識を高めることになる。さらにこの経験を通して、指導性を涵養することになり、社会化への道を展くものである。

第3の知的側面としては、海洋性スポーツ、レクリエーションは海洋を中心にした活動のため、さまざまな知的学習を要求する。自然現象としての海象 (潮流、海流、波浪)、気象など海洋の基礎知識から海上交通のルールまた帆走に至っては、流体力学についての学習までも必要とされる。また、レクリエーションの範疇においては人文的な学習、研究を日本のみならず世界的視野においてすることすら触発させる機会を提供する。

最後の身体的側面としては活動展開の場が戸外での活動が中心であることに着目したい。元来日本での健康法の一つとされと来た海水浴で見られる如く、海洋を中心とした身体活動は、健康の保持増進を助長するものである。

二、三のプログラム活動を除いて海洋性スポーツ、レクリエーションでの身体的活動は、運動形態として持久力、筋力、敏捷性、平衡性、柔軟性の諸機能を高める行動体力づくりが海洋性スポーツを競技スポーツとしてする者以外の者にも促進されるとされている。

とくに昨今の青少年の自然体験が欠如し、参加する体験的自発的学習意欲を持たず、欲求不満に対する耐性を持たず、また総合した行動体力を持

たない青少年に対して、新しいインパクトを与えるものとして海洋性スポーツ、レクリエーションはその青少年に価値ありと断ずることが出来る。

また 単に青少年の人間教育に効果をもたらすにとどまらず、老若男女を問わず余暇活動のなかで「賢明な利用」「価値ある利用」「創造的な利用」(wisely use, worthwhile use and creative use of leisure) をもたらすプログラムであるとの評価が生れつつある。

参考文献

1. 梅田利兵衛, 長谷川純三監修・野外運動研究会編, 水辺野外活動ベースボール・マガジン社, 1984.
2. 総理府編, 観光白書, 大蔵省印刷局, 1984.
3. 日本舟艇工業会資料, 1983.
4. Richard Kyaus, Recreation and Leisure in Modern Society. Scott. Foresm and Company, Glenview, Illinois, 1984.
5. William Menninger, Recreation and Mental Health National Recreation Association, 1960.